“心の壁”が今でも残る世界と向き合うために

東ドイツに暮らす高校生が、教室で行ったわずか2分間の黙禱。それが周囲を揺るがす大事件へと発展し、追い詰められた若者たちは大人が全く予想もしなかった行動に出る……。ドイツ国内でも知る人の少ないこの史実を描いた映画『僕たちは希望という名の列車に乗った』（ラース・クラウメ監督）が5月17日（金）から劇場公開されるのを機に、ビジネスインサイダージャパン統括編集長の浜田敬子さんに聞いた。

ビジネスインサイダージャパン 統括編集長
浜田敬子さん

社会主義体制が恐れた若者たちの素朴な怒り

――1956年のハンガリー動乱に衝撃を受けた2人の高校生が事件の犠牲者のために黙禱を呼びかけたことが、自らとまわりの運命を大きく変えていきます。映画をご覧になって何を感じましたか。

彼らの日常は意外に楽しそうだ、というのが第一印象でした。主人公たちは普通に恋愛もする、将来に夢も持っている、男の子が集まれば、「西側では自由にポルノが見られるのか」なんて話で盛り上がる。どこにでもいる普通の若者たちです。暮らしは決してぜいたくではありませんが、つつましいながらも普通の幸せがある。もちろんあの事件が起こるまでは、ですが。

――そんな日常は、ある日を境に一変します。

彼らは声高に政治的主張をしたのでも、国家を批判したのでもありません。しかし若者らしい正義感や反骨心をほんのわずかでも見せた途端、牙をむいて襲いかかってくる。そんな体制の怖さをまざまざと思い知らされました。特に怖かったのが、彼らを追い込んでいく大人たちのやり口です。誰々は君が首謀者だと言っているよ、といって疑心暗鬼にさせていく。大人でも耐えきれるかどうかわからないですよね。

――体制側が容赦ないのは、若者たちの行動がそれほど危険だったからでしょうか。

約30年後にベルリンの壁を壊したのも、こうした若者のエネルギーだったと思います。アラブの春や香港の雨傘革命でも、発端は若者の素朴な疑問や怒りでした。常識に目が曇っていない、体制におもねることもない、そうした人の言葉だからこそ本質を突くことができるし、物事を動かす力を持ちうる。そのことをあらためて強く感じました。

東と西で食い違う情報、何が真実なのか

映画はこの世界の姿を私たちに見せてくれる

――子どもたちに比べて、その親たちはなかなか本心を口にすることがありません。その対比も印象的です。

大人はそれぞれに事情、言い換えれば歴史を背負っているからです。一人ひとりが重荷を抱え、その重さに耐えながら、子どもには「余計なことを考えずしっかり勉強しろ」という。一見ありふれたそんな言葉が、親たちのどんな思いで発せられたものだったかがわかる後半の物語は、実に感動的でした。

――最終的に生徒たちは、大きな決断を下し思い切った行動に出ます。

まだ10代の子どもたちが、それ以外に選択の余地がなかった、そんな状況がまっとうであるはずがありません。1人の親として、見ていて胸が詰まりそうでした。映画のタイトルにある通り、彼らは希望という列車に乗ったのかもしれませんが、その行き先が幸福であるとは限らない。列車に乗ることすらかなわなかった生徒もいる。彼らのその後はどうなったのか、見終わってずっと考えさせられました。

――これは、約60年前の社会主義国家での出来事です。それを私たちが今見る意義はどこにあるでしょうか。

第2次世界大戦後、何十年も分断されていた世界が、89年のベルリンの壁崩壊を機にようやく融和に向かうと私たちは期待しました。しかし今、世界はまた分断されています。ベルリンの壁はなくなっても、心の壁は消えていません。人が人を追い詰めていくことの怖さ、イデオロギーに凝り固まることの空しさ、人を陥れてでも自分を守ろうとする姿の醜悪さ、それを何度でも見せることが映画や文学の使命であり、私たちはそれを何度でも見る必要があると思います。

テオの父は労働者として生きるつらさを息子に教える

はまだ・けいこ／1989年朝日新聞社入社。99年からAERA編集部。記者として米同時多発テロやイラク戦争の現地取材も経験。AERA初の女性編集長として数々の新機軸を打ち出す。2017年4月から現職。TVコメンテーターなどでも活躍中。

若者らしい問題意識と素朴な正義感が彼ら自身を追い詰めていく

映画
『僕たちは希望という名の列車に乗った』

INTRODUCTION

1956年、ベルリンの壁が築かれる5年前。ドイツはすでに東西に分断されていたが、中立地帯の役割を負う特別管理地区・ベルリンでは、まだ人の行き来が可能だった。墓参りを口実に西ベルリンへと出かけた2人の高校生がニュース映像で目にした「ハンガリー動乱」は、この年10月に始まっている。

社会主義国に暮らす若者たちが報道や言論の自由を求め、ソ連の撤退を訴えた抗議活動は、11月にソ連が介入したことで強制的に鎮圧される。ハンガリー側の死者は約2,500人、国外に逃れた人は約20万人。若者たちの行動は、東側では「反革命主義」と非難され、西側では「自由を求める闘争」と報じられた。

STORY

西ベルリンの映画館で、ハンガリー動乱のニュースを偶然目にした高校生のテオとクルト。東ドイツ・スターリンシュタットの街に暮らす彼らは、同じ社会主義国の若者たちの勇気ある行動と、それが武力によって鎮圧されたことに激しく心を揺さぶられる。後日、彼らがクラスメートに呼びかけたのは、犠牲者に哀悼を示す2分間の黙禱。たったそれだけのことが、反体制的行動と目され、国務大臣までが学校に乗り込んでくる事態に。首謀者の名前を明かせと迫られた生徒たちは、エリートとして生きるため仲間を売るのか、友情のため自らの将来を犠牲にするかの岐路に立たされる。

HISTORY

1945年 ドイツ無条件降伏。ベルリンは戦勝4カ国によって東（ソ連）と西（米英仏）に分割占拠。
1948年 ベルリン封鎖（～49年5月12日）。
1949年 東西ドイツ分断。ドイツ連邦共和国（BRD）＝西ドイツ成立、ドイツ民主共和国（DDR）＝東ドイツ成立。
1953年 東ベルリン暴動（6月17日蜂起）。
1955年 西ドイツ、NATO（北大西洋条約機構に加盟）。東ドイツ、ワルシャワ条約機構に加盟。
1956年 ハンガリー動乱。
1961年 「ベルリンの壁」構築。
1967年 ヨーロッパ共同体（EC）発足。
1968年 チェコスロバキア「プラハの春」。
1973年 東西ドイツともに国際連合加盟。
1980年 ポーランド「連帯」結成。
1987年 ソ連「ペレストロイカ」始まる。
1989年 「ベルリンの壁」崩壊、中国「天安門事件」。
1990年 ドイツ統一、貨幣統合（東ドイツマルクの廃止）。